

- 町郷土博物館報告』7 浦幌  
 ——— (1980) 『芽室町産蝶類ガイド』 芽室  
 円子紳一 (1973) 「浦幌町の蝶類レポートI」『浦  
 品町郷土博物館報告』2 浦幌  
 ——— (1976) 「浦幌町郷土博物館所蔵の阿部  
 宏氏の標本」『浦幌町郷土博物館報告』  
 7 浦幌

- (1977) 「帯富で採集したヒメキマダラ  
 ヒカゲ」『浦幌町郷土博物館報告』9  
 浦幌  
 ——— (1979) 「東山でイシダシジミを採集」  
 『浦幌町郷土博物館報告』14 浦幌  
 ——— (1980) 「アサギマダラ2頭を採集」『浦  
 品町郷土博物館報告』16 浦幌

## 生剛という地名についての覚書

後藤秀彦

### I

近年、地名に関する発言が識者の間から声高らかに叫ばれている。こうした傾向は、全国的な傾向と受けとめられるが、殊に北海道では地形を基調としたアイヌ語の地名が、字名改正や新設の団地などの出現でその歴史的経過や由来を全く無視した「青葉町」だの「宝町」だの「緑阳台」だの名称を用いる傾向が強まっている。地名は一種の文化財を見る考え方方が強調されている。それは「地名はあらゆる固有名詞の中でもっとも変化しにくい頑固な性質をもっている。それと同時に、時代と共に自然にあるいは作為的に変化する。地名にはならない面と変っていく面の二面性がそなわっている。すなわち地名には時間の推移にしたがう多様性と、それを超えた同一性がみられる。」(谷川編、1978) からであろう。

この小論では、現在でも使用されている「生剛」という地名を取りあげて知れるところを記してみたいと考えている。

なお、古地名等の採集については古文書・古地図等を利用したが洩れているものも多々あると思われるので、ご教示願えれば幸甚である。

### II

「生剛」とは、現浦幌町の前身、「生剛村」の戸長役場の所在したところである。現在では「生剛村市街地」は浦幌や吉野へ移転し、一面畠となつて「浦幌町発祥の地」の石碑が往時の面影の一端を窺わせるばかりである。1900年、当時の大津村から分村し、生剛の地に「生剛外二ヶ村戸長役場」が設置され行政事務を執り始めたことをもって浦

幌町の開基としているが、この「セイゴウ」と発音される地名の原義については諸先学の間に異論はなかったものの、その由来については積極的な分析をすすめる者がいなかつたのが実情であった。

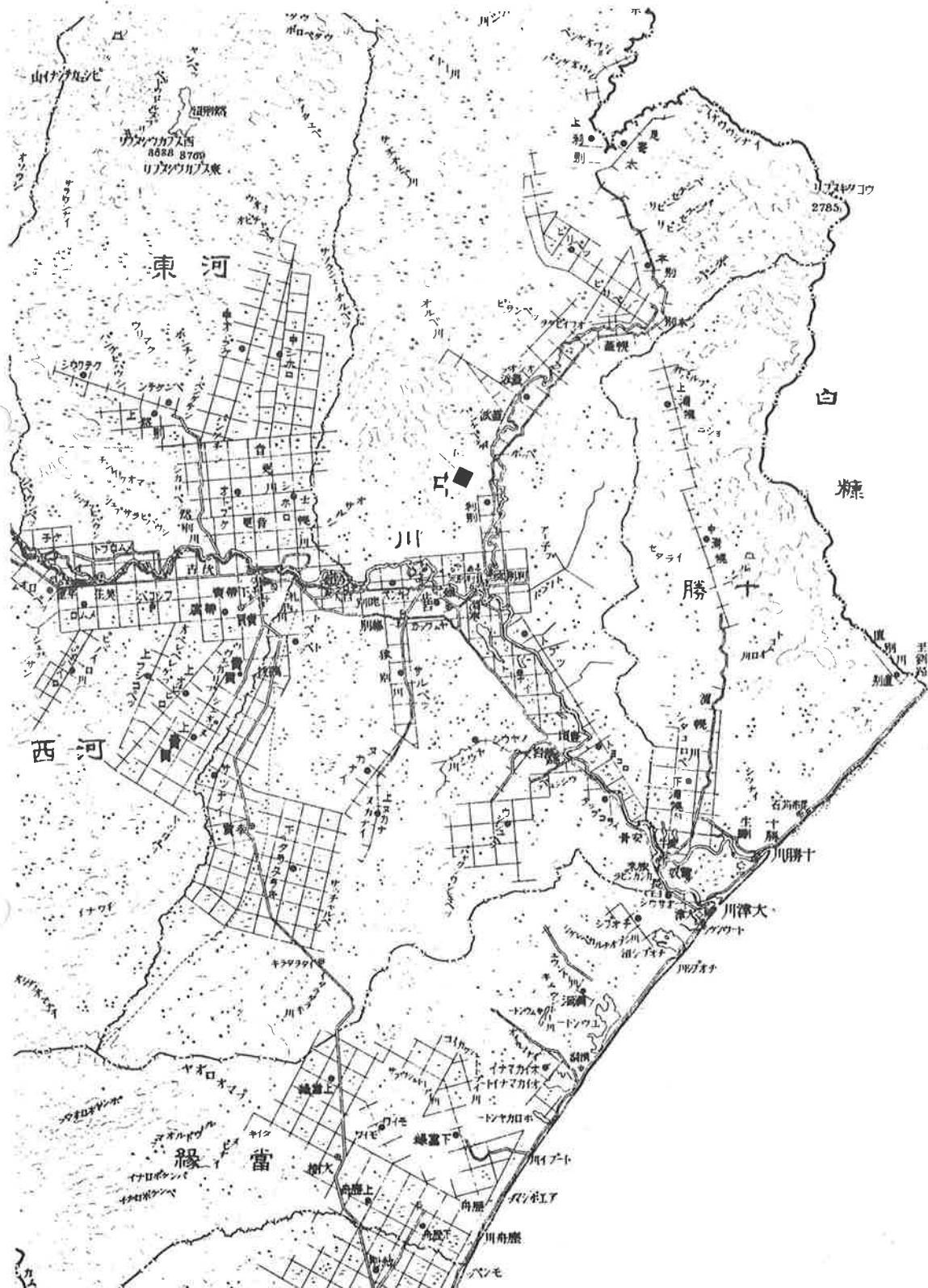
「生剛」は、現在では誰もが何の抵抗もなく「セイゴウ」と発音しているが、本来はアイヌ語地名の「オペッカウシ」であり、それに「生剛」の漢字があてはめられ、それが次第に「セイゴウ」と音読され、慣例化していったものである。

オペッカウシとはアイヌ語で〔O-pet-で〔尻を・川・の岸に・くっついている者〕の意味である。これを、永川方正(1891)は「川岸」と訳し、生剛村の原名としている。また、知里真志保(1956)は、川岸が高い岡になって続いている所。〔〔O (尻、陰部) pet (川) ka (上、=岸) usi (につけている)-i (者)、——尻(陰部)〕を川岸に突き出している者、と考察している。

こうした地形をもつ川と丘の関係は北海道内各所にあるが、現に札幌の三角山が琴似川と接している地点も同様に呼ばれていた。しかし、現在の生剛地区にはそういう地形に相当する地形はなく、この地名がいずれかの時期にいずれかの地点から移転したものと考えられるが、この点について古文書等からオペッカウシに関する地名を採集し、検討を加えてみたい。

### III

浦幌町にかかる地名は、江戸時代中期からの古文書に散見される。それらの多くは、太平洋岸に点在するものであるが、中には松浦武四郎の一連の紀行のように十勝川沿岸に及ぶものもある。



Map I 「北海道殖民状況報文 十勝」の十勝全図の一部分 (1901年)

これらの古文書および地名は江戸時代末期から明治期にかけての浦幌町、十勝の様相を明かにするうえで欠かせないものである。

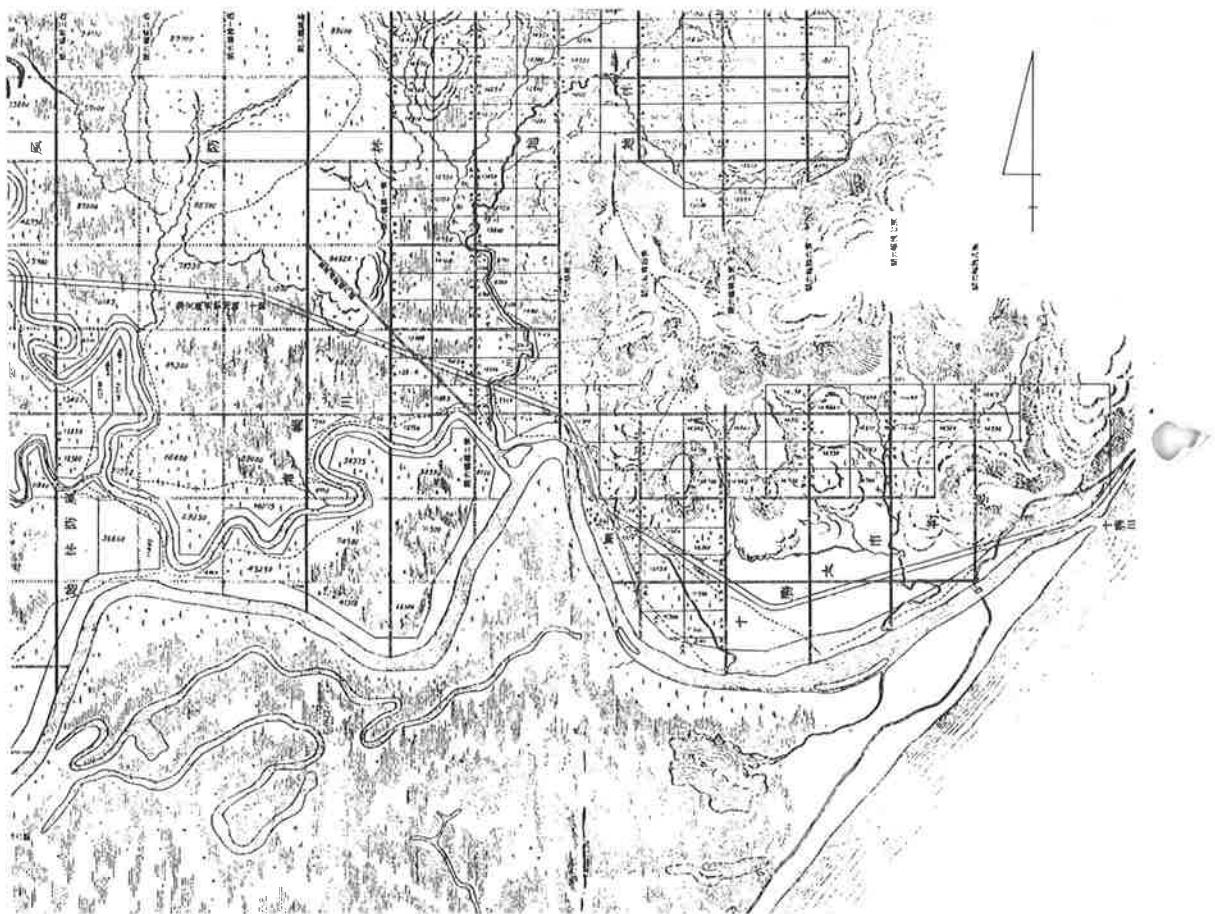
さて、本町にかかる地名で最も古いものは「トカチ」の地名であろう。この地名の由来および原義については不明な点が多く研究者の間でも議論の分れているところである。「トカチ」の初見は1643年のオランダのカストリクム号のフリースによるものである(児玉、1971)。これによればカストリクム号は八丈島付近で大暴風雨に遭い6月9日に十勝沖に来航した。彼らの記録には「タカプチ (Tacapte)」と記され、東経162度30分北緯42度44分の位置であったという。この位置は北海道島のはるか東方海上に相当するが、彼らの残した記録から考えて現、十勝のいずれかの土地と考えて大差ない。ここで、彼らは小舟に乗った

3人のアイヌ人と出会っている。

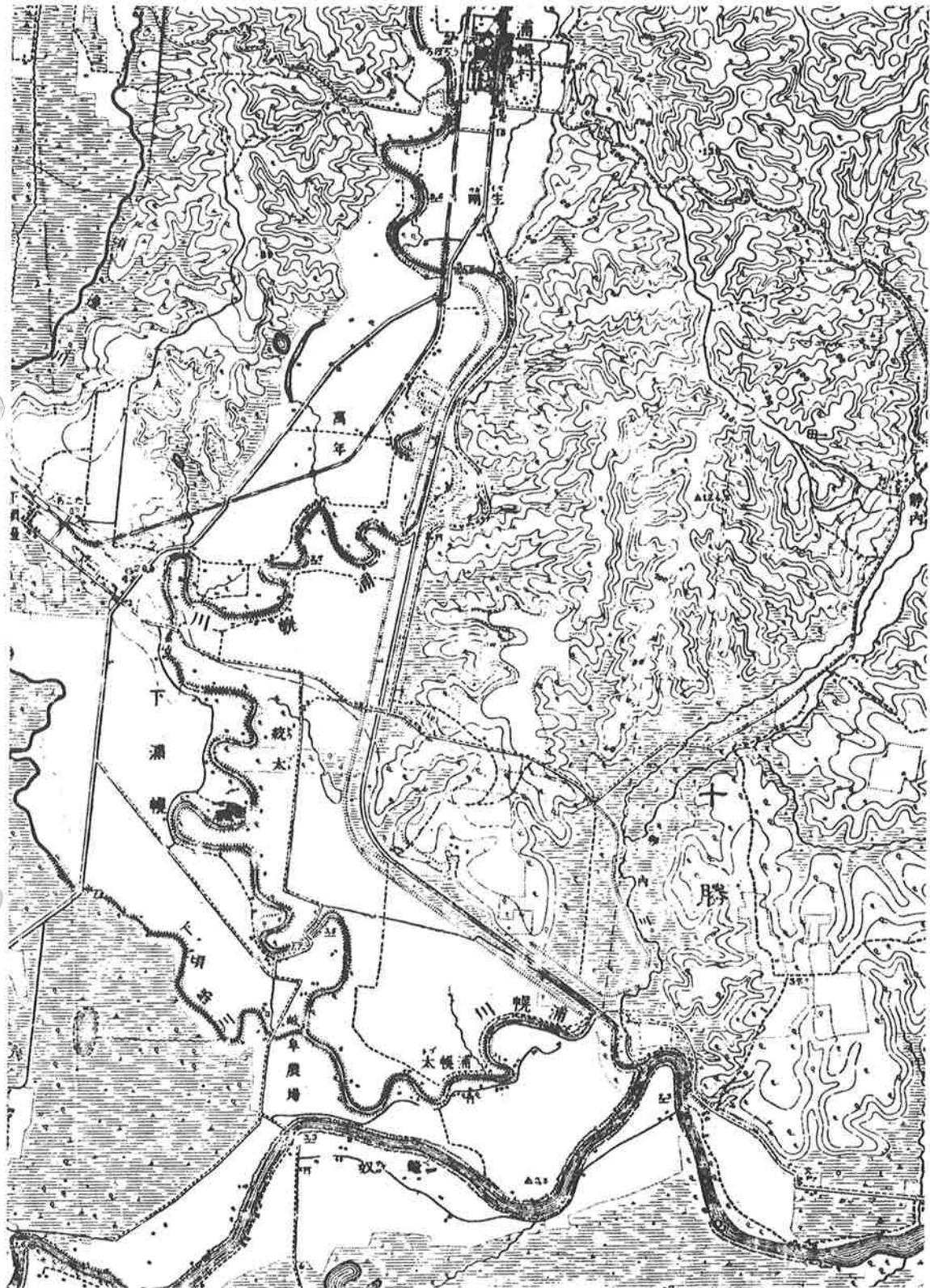
次に「トカチ」の地名が見られるのは「元禄国絵図」である。この地図には、太平洋岸の地名として西から順に「ほろいづみ、たもち、とまり、おんべつ、とかち、しらぬか」とあり、「おんべつ」と「とかち」の順は違っているものの、「とかち」の地名は十勝川々口東岸にあり、現在の「十勝太」付近を指すものと考えられる。

その後、「トカチ」の地名は『和漢三才図絵』(寺島、1712)、『寛政蝦夷取調日記』(新井田、1789)、『唐太話』(布施、1843)など多くの記録に見られるが、本論の「オペッカウシ」の地名は、松浦武四郎の一連の紀行が出るまでは見られない。すなわち、『竹四郎廻浦日記』、『十勝日誌』、『東蝦夷日誌』によってである。

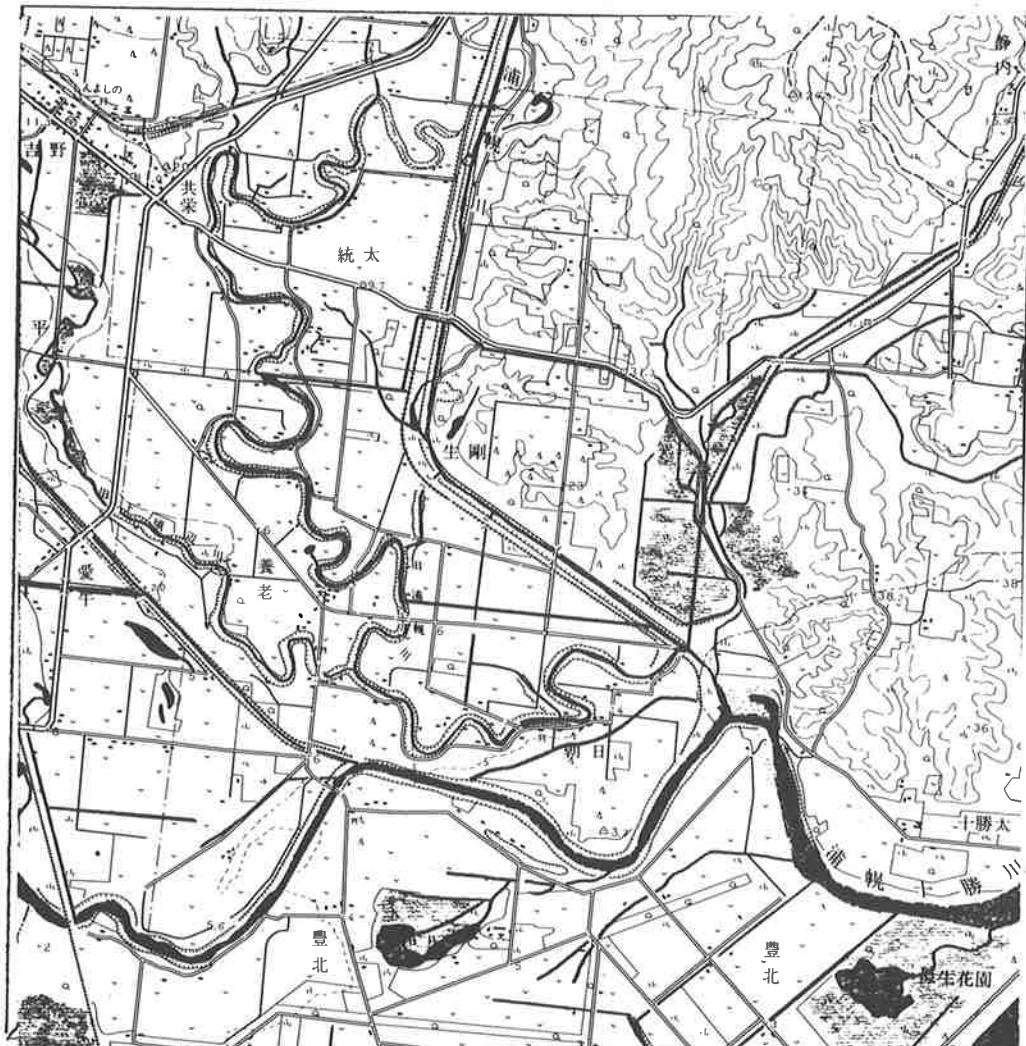
次にそれらの関連部分を抜書しておこうと思う。



Map 2 十勝國殖民地区画図（下浦幌原野之内、豊頃原野之内）の一部分（1910年）



Map 3 参謀本部、大正9年測図5万分の1 地形図の一部分 (1920年)



Map 4 現在の5万分の1地形図（1981年）

## IV

- 『竹四郎廻浦日記』（松浦、1857）

ヲヘツコウシ

此處えも老人引越し來り居る由（脇乙名ヲトリ家内四人）少し上りで、……

- 『十勝日誌』（松浦、1861）

ホーヌイ奈<sup>リ</sup>。アシネシュム<sup>立</sup>、此所人家六軒。過てタツタラ<sup>立</sup>、スタベト<sup>立</sup>、人家三軒。向にウラホロブト<sup>川中</sup><sub>十間</sub>。源はアショロの南クスリ領<sup>ヲ</sup>ンベツ岳より来る。當川第九の支流也。河口に人家二軒有。下りシチネイ<sup>立</sup>、並て<sup>立</sup>ラベツコハシ、人家九軒有。過てベツモシリ<sup>川中</sup>と云。蘆荻洲有。左りに人家三軒。此處に船渡し有。是則トカチ村とて本川口也<sup>巾凡百五</sup>。此間一り半斗

- 『東蝦夷日誌』（松浦、1865）

扱下りまゝ三人にて勢限りて搔下り、別ても四ツ過より出し風起り来りしまま、席を帆となして、ハツ過ベツチャ口<sup>キナ</sup>に来る。従レ最右ヲホツナイ、川口<sup>ヨリ</sup>の方は當春見分致せし故、左の本川筋を下る。ベツチャ口は川口の儀也<sup>廿峰</sup>。ホースイ<sup>左小</sup>、アシネシュム<sup>立野</sup>、人家五軒 サツカラクコブイ、ヤケノサナシカ、ナミキリマツ、エミチカ有。過てクッタラ<sup>立</sup>、スタベト<sup>立</sup>、過てウラボロブト<sup>當川第六支流</sup><sub>川幅六間、深五</sub>、物て蘆荻原にて深し。名義、源に笹多しとの儀。両岸字小川多し。谷地多く、其源ヤラ<sup>立</sup>、カハロウ<sup>立</sup>と別れ、<sup>ヲ</sup>ンベツと足寄の間に入る也<sup>クニ古日ノト申口</sup>。此辺チライの五六尺の物ありと。過てシチネイ<sup>立</sup>、人家二軒、<sup>ヲ</sup>ベツコハシ<sup>平</sup>、人家多ヒ<sup>立</sup>、トヒテエテキ、シヤハチ<sup>立</sup>、モナクマラエ、ルカブチオノ。前にベツモ



PL. I オベッコワシの原位置と十勝太Dチャシ

シリ島と云て蘆荻島有。

ワワウシ鳩、人家三軒コンラハ、カシナ有。是よりヲホツナイ迄陸路一里、惣じて海岸で眺望し、惜らくは大船に懸るに不便なるを、若此川口をしてヲホツナイの方を開て一口となす時は、トカチの川口水勢倍して頗る大船を容る湊となるべく思われる。

#### ●『石狩十勝両河記行』（松本、1876）

十勝州各村土人役々、

廣尾郡茂代呂村摠乙名三次郎、並乙名仁三郎同（シコシコフ）<sup>同</sup>五郎吉、脇乙名（バシュリコ）

十勝郡ヲベツコアシ村摠乙名（ヲトワ）同郡並乙名（マカヌカル）

同郡アエヌウシ村並乙名（トナシリキン）同郡長向村同（サンキ）

中川郡（ヤムワッカヒラ）村並乙名（アフネカアキノ）（ハウラレ）

同郡千代田村並乙名（エレルシコロ）（コムリレ）

同郡テロト村同（タハエ）

河東郡ヒハイロ村並乙名（ハウケアキノ）<sup>同乙名</sup>

上川郡ニトマフ村（シルンケアキノ）<sup>（テ）</sup>

河西郡蔭村並乙名（メトクル）

同上帶廣村摠乙名（マウカアキノ）

●『北海道殖民狀況報文 十勝國』（河野、1901）  
官衙及管轄の項中、「十勝郡」の欄に「大津村<sup>オオツ</sup>  
オサス<sup>オサス</sup>トカチ<sup>トカチ</sup>オヘコハシ<sup>オヘコハシ</sup>アイニウシ<sup>アイニウシ</sup>ベツチヤロ<sup>ベツチヤロ</sup>  
長臼村<sup>オサス</sup>十勝村<sup>トカチ</sup>生剛村<sup>オヘコハシ</sup>愛牛村<sup>アイニウシ</sup>鼈奴村<sup>ベツチヤロ</sup>」と  
ある。

#### V

次に古地図をみていくことにしよう。Map 1 は『北海道殖民狀況報文 十勝』（河野、1901）の卷頭に掲げられた「十勝國全図」の一部である。これによれば「生剛」の位置は明かに十勝川が北に向かって大きく屈曲する地点の東岸、十勝の西に当る。

Map 2 は、『十勝國殖民地区画図（下浦幌原野之内、豊頃原野之内』（北海道庁、1910）の一部である。原図は2万5千分の1であるが、本図は5万分の1に縮尺してある。これによれば「生剛」の地名は東3線と東4線の間、南13号と南14号の間に記入されている。すなわち、この位置は前図と同様に十勝川が大きく「く」の字形に屈曲する東岸の段丘上に当る。

Map 3は、参謀本部が1920年に測量した5万分の1地形図の一部である。この時期の地形図となると現在のものにくらべて遜色ないが「生剛」の位置は大きく変化し、浦幌市街の南、現在の光南団地付近に移動している。

Map 4は、現在流布している『浦幌町全図』(浦幌町役場、1981)の一部である。太実線で囲んだ部分が「生剛」の範囲であるが、この中には旧生剛市街の範囲も含まれている。しかし、この範囲の中には、Map 1 およびMap 2で示した「生剛」の範囲は含まれていない。

## VI

以上のように、古記録と古地図および現在の地図を年代順に見てくると「生剛」の位置が各時期毎に大きく変動していることに気付くであろう。同時に、一つの地名が本来の位置とは無関係に一人歩きをし、元の位置とは全く関係のない土地に定着してしまったことに気付くであろう。

本来のオペツカウン（生剛）の位置は、そのアイヌ語の意味する〔尻を・川・の岸に・くっついている者〕から考えて、Map 1 およびMap 2の位置であったことは明かである。アイヌ語の〇は、尻や陰部を意味するが、後部分の〔の岸に・くっついている者〕との関連から、十勝川と丘とが陰部をくっつけ性交している様子を表現しているものである。アイヌ語ではしばしば川を生物にたとえ、比喻的に表現することが多いが、このオペツカウシという地名もそうした例の一つである。

なお、『浦幌村五十年沿革史』（間宮、1949）において、アイヌから西田小次郎が聞いた話として「現在の大津村十勝太の小学校裏にある沢の名称から採ったもので、オペツコワシとは山から川の流れ落ちると云う意味で、同処にある小溪をオペツコワシ沢と称呼した」という記載は興味のあるところである。オペツコワシのアイヌ語による分析に同意はしかねるとしても、その位置がまさにMap 1 およびMap 2の地点であり、伝承からもこの地点がオペツカウシであることに疑いはない。

さて、この丘が川に突き出た地点にはチャシ跡が残されている。十勝太Dチャシ跡である。地名から言うと「オペツカウシチャシ」とでもした方が妥当なのかもしれない。チャシからは、十勝川を隔てて旅来チャシやカンカンビラチャシを一望

することができ、極めて眺望の良い場所を選択して構築されている（後藤、1980）。往時、このオペツカウシ付近に大きなコタンがあったことは、チャシの存在のほかに擦文期聚落跡や松浦武四郎・松本十郎らの記録で十分に汲み取ることができるが、明治～大正にあっても、この地区は「プロト」「コタン」「シズナイブト」の三ブロックに分かれ居住しており（十勝小学校開校70周年記念祝賀協賛会、1976）、このうちのコタンの付近がオペツカウシに当る。

（浦幌町郷土博物館学芸員）

## 引用文献

- 新井田孫三郎（1789）『寛政蝦夷乱取調日記』  
 浦幌町役場（1981）『浦幌町全図』  
 河野常吉（1971）『北海道殖民状況報文 十勝』  
 児玉作左衛門（1971）『明治前日本人類学・先史学史』  
 後藤秀彦（1980）「十勝太D チャシ」『日本城郭大系』1  
 谷川健一編（1979）『地名の話』  
 知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典』  
 寺島良安（1712）『和漢三才図絵』  
 十勝小学校開校70周年記念祝賀協賛会（1976）『とかちぶと十勝小学校70年の歩み』  
 永田方正（1891）『北海道蝦夷語地名解』  
 布施虎之助（1842）『唐太語』  
 北海道庁（1910）『十勝国殖民地区画図（下浦幌原野之内・豊頃原野之内）』  
 松浦武四郎（1857）『竹四郎廻浦日記』  
 ——————（1861）『十勝日誌』  
 ——————（1865）『東蝦夷日誌』  
 松本十郎（1876）『石狩十勝両河記行』  
 間宮不二雄（1949）『浦幌村五十年沿革史』

1981年12月10日	印 刷
1981年12月20日	発 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 家 村 克 行	
発 行 所 浦幌町郷土博物館 (089-56)	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社 (080)	
北海道帯広市西7条南6丁目	